

ズーム・アップ

大学における環境保全の現場から

信州大学環境安全センター

井 勝 久 喜

私が岡山大学から信州大学へ転任して早くも半年になろうとしています。岡山大学在職中のご厚情ご指導に対してこの紙面をお借りし皆様に厚くお礼申し上げます。

振り返りますと、昭和52年4月に岡山大学特殊廃水処理施設に着任以来9年という長い間、岡山大学から発生する実験・研究廃液の処理に携わって来たわけでありますが、その間に特殊廃水処理施設も環境管理施設、そして環境管理センターへと発展致しました。多くの事柄に共通して言える事だと思いますが、生長期・発展期は苦しい事が多い反面充実している時期でもあり、私が環境管理センターに在職した期間はまさにその時期であったわけですが、今後も現状に満足せずさらに機能を充実させ、名実ともにセンターとして発展していただきたいと思っております。

ところで、私は岡山大学における環境保全の現場で働いて来たわけですが、環境保全の現場からの声はその業務自体が非生産的な理由からか、えてして無視されがちでありました。そこでこの機会に環境保全の現場を少しでも理解していただき、さらには大学から発生する公害が少しでも無くなればと思ひ、私が9年間現場で働いて強く感じた事を2点に絞ってまとめることと致しました。

まず第1は公害問題を取扱う大学内の組織に関する件であります。大学には各種委員会が設置されており、大学から発生する公害問題を取り扱う委員会も設置されています。しかし、委員会はあくまで協議・決定する機関であり、実務を行う組織は別であります。特に公害問題に対応するためには実務を行う組織が必要なわけですが、大学におけるこの実務組織はかなり貧弱なものであります。

岡山大学程度の規模の一般の会社であれば、公害問題担当の部課はすでに設置されているでしょうが、大学はかなり特殊な機関であり、今だに完全な組織化がなされていません。廃液の処理施設は殆どの国立大学に設置されていますが、その多くが処理施設の管理・運営方法が曖昧なまま廃液の処理を行っています。処理施設は設置したが、管理する部局がなく処理施設を作った施設部がそのまま管理まで行ったり、廃液を最も多く出す部局が管理したり、中には各部局持ち廻りで管理している大学まであります。実際に実務を行っている職員にとってはたまったものではありません。岡山大学も例外ではなく、当初工学部が管理していましたが、諸般の事情で施設部が管理するようになりました。廃液処理施設の側から見れば、全学共同利用施設としての機能が十分に発揮でき、事務処理あるいは各種問題に対する対応が円滑に行えれば管理部局はどこでも良いのですが、処理

施設を管理するようになった部局はえてしてお荷物施設を引き受けたと考えがちであり、円滑な事務処理を望むことができないばかりか、何か問題点があっても規程に定められている事、つまり廃液の処理以外の事は見るな、聞くな、言うなというのが実際のところだ。そこで、処理施設に事務機構も組み入れてセンター化する構想が出てくるわけですが、大学ではこのような組織を作るのは非常に困難なことであります。現場にいる私から見れば、現在各部局が部局毎に対応したり、その場しのぎで対応が行われている大学の公害問題、あるいは環境問題まで含めて、その全てに対応できるだけの組織が作られれば、大学全体として非常にメリットがあると思えるのですが、これはかなり困難なことでありましょう。しかし、岡山大学には現在これらの問題に対してある程度対応が可能な環境管理センターという一つの組織があるわけですから、この組織をさらに充実させることは比較的可能なことだと思いますし、是非そうしていただきたいものです。

つぎに感じた事は、大学内部にいる人の公害問題への関心の低さです。学内の人の社会一般の公害問題に対する関心は決して低くはないと思うのですが、それが自分の事となるとなかなか実感が湧いてこない人が多いように思えます。大学から発生する公害は主に実験・研究・医療活動に起因しているのですが、それらに携わっている人が自分が使っている薬品あるいは材料の危険性をあまり知らない場合が多く、またたとえ知っていたとしても少しぐらいなら問題はないだろうと考えて安易に廃棄してしまうのが以前の状況でした。岡山大学の場合、環境管理センターが公害問題に関する情報を流しているのですが、他大学に比較してかなり公害問題への関心は高いように思えるのですが、今だにセンターへ来て廃液はどこに棄てれば良いのですか、と言う人がいるのも事実であります。しかし、一方では先日文部省から、絵具中の重金属に対して注意を払うよう各大学へ指導が行われたが、岡山大学の場合は教育学部からの問題提起によりすでに解決が行われていたという実例があります。このことから、大学内から発生する公害を防止するためには、私たちのような現場の職員が対策を実行することも必要であるが、さらに有効な公害防止の手段は、大学内の人が公害問題に対してもっと関心を持つことだということがわかります。そのためには環境管理センターに公害問題に関する実務を集中させるとともに、センターを教育機関として発展させる必要があると感じた次第です。

以上、岡山大学環境管理センターに勤務して感じた事を2点に絞り書いてまいりましたが、まとものないものとなってしまいました。しかし現場の声は断片的にでも理解していただけたのではないかと思います。

大学は教育・研究の場であります。公害の発生を気にせずに自由に研究ができる場になっていただきたいものです。そのために、全ての環境問題に対応できる組織を作ったらいかがなものでしょうか。

